

研究・調査報告書

報告書番号	担当
364	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名 (原題/訳)	
Drinking pattern and mortality in middle-aged men and women. 壮年期男女における飲酒パターンと死亡の関連	
執筆者	
Tolstrup JS, Jensen MK, Tjonneland A, Overvad K, Gronbaek M.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Addiction. 2004; 99: 323-30.	
キーワード	
飲酒、飲酒行動、追跡調査、死亡	
要 旨	
<p>背景</p> <p>飲酒と総死亡の間にはJカーブの関連が見られ、これは適量飲酒が循環器疾患に対する防御効果を示すことと、多量飲酒が肝臓病やがんの死亡率を高めることが合わさった結果と考えられている。しかしながら飲酒パターン（飲酒頻度と量の組み合わせ）を考慮した研究は少ない。本研究では飲酒パターンと総死亡の関連を検討した。</p> <p>対象と方法</p> <p>1993年～1997年にかけて約16万人のがんの既往歴のない50～65歳のデンマーク人男女が“Diet, Cancer and Health（食事、がんと健康）”研究への参加を郵便で呼びかけられた。このうち35%（男性27,178人、女性29,875人）が研究に参加し、飲酒を含む192項目の詳細な量頻度法による栄養調査が実施された。これらの対象者は2003年2月まで追跡され、飲酒パターンと総死亡の関連が検討された。</p> <p>結果</p> <p>平均追跡期間は6.8年であり、男性1,528人、女性915人が死亡した。飲酒パターンと死亡の関連は、年齢、教育、喫煙、肥満指数（BMI）、身体活動量、食事（魚、調理済み野菜、サラダ、フルーツ）を調整した上、比例ハザードモデルで検討した。同じ平均飲酒量であれば、飲酒頻度が少ないほうが高い死亡率を示した。例えば、1週間の飲酒量が14～20 drink（1 drink=12グラムのエタノール）でも、飲酒頻度が週1回以下だと、週5～6回に比べて約2倍の死亡率を示した。男性で死亡率が低かったのは、飲酒量が週7～13 drinkかつ飲酒頻度が週5～6回、及び飲酒量が週14～21 drinkかつ飲酒頻度が週5～6回の場合であった。週1 drink未満かつ週1回以下を1.00とした場合の相対危険度は、それぞれ0.51（95%信頼区間：0.36-0.73）、0.52（0.35-0.76）であった。女性では有意差はないものの、死亡率が最も低かったのは、飲酒量が週1～6 drinkかつ飲酒頻度が週5～6回、及び飲酒量が週7～13 drinkかつ飲酒頻度が週5～6回の場合であった（相対危険度は0.72、0.84）。逆に死亡率が最も高いのは、男性では21 drink以上かつ週1回以下、女性では14 drink以上かつ週1回以下（相対危険度は1.25、2.19、後者は有意差あり）であった（男女で飲酒量が異なるためそれぞれ21 drink以上、14 drink以上が最大区分）。</p> <p>結論</p> <p>単純な飲酒量ではなく、飲酒パターンが死亡との関連において重要である。飲酒と健康に関する公的なガイドラインには、量だけでなく飲酒パターンについての記載も必要である。</p>	